

徳島県佐那河内村における健康を核にしたまちづくり

真田 純子¹

¹正会員 徳島大学大学院助教 ソシオテクノサイエンス研究部 (〒770-8506 徳島市南常三島町2-1)
E-mail:sanajun@ce.tokushima-u.ac.jp

徳島県佐那河内村には、ジョギングや自転車、ウォーキングに訪れる人が多い。しかしながら現在は、素通りする人がほとんどで、地域の利益に還元されていない。そこで健康に関心のある層をターゲットにしたウォーキングイベントであるオープンファームを企画・実行し、またそれをベースに他の施策とともに「健康を核としたまちづくり」のビジョンを検討中である。オープンファームとは、自慢の庭を開放して来訪者に見せる「オープンガーデン」にヒントを得たもので、村内を散策している途中で有機栽培の畑に立ち寄り、そこで自らの手で野菜を収穫し購入出来るという仕組みである。本発表では、こうした活動が村民や村の景観に与える影響について考察する。また、「健康を核にしたまちづくり」のビジョンと諸施策の体系、そこでの景観の役割を紹介する。

Key Words : *open farm,health,agriculture,walking*

1. はじめに

中山間地では、農地などの一次産業が風景の主体となっている。地域がその魅力を保ちつつ活力をもって持続していくためには、風景を維持、活用していくことが重要であると言える。その際、中山間地の風景は「地域の人々の暮らし」の結果であると同時に、地域外の人々を引きつける資産でもあるという点、および次世代にそれらを引き継ぐという視点を考慮する必要がある。

そこで本論では、以下の3つの論点に着目しながら佐那河内の取り組みを紹介する。

- 1) 風景を生み出す一次産業を成り立たせること
- 2) 風景を活用し、地域に活力を潤いをもたらすこと
- 3) 風景を維持する次世代を取り込むこと

本論ではまず、2章において佐那河内の「健康を核にしたまちづくり」のビジョンを紹介し、3章では、それに至る経緯について述べる。4章では、ビジョンに対して、現在行われていること、出来ていないことについて整理し、その要因について考察する。

2. 佐那河内におけるビジョン

佐那河内村は、徳島県に唯一存在する村で、徳島市の南西部に隣接している。人口2700人弱で、そのうち65歳

以上の人口割合が約4割をしめ、高齢化が進んでいるといえる。主要な産業はみかん、スタチ、ももいちごなどの農業である。

このような状況のため、地域の風景の主体は一次産業であり、またそうした風景の次世代への継承を考えていく必要のある地域である。

これらの問題を総合的に解決するため、筆者らは「健康を核にしたまちづくり」を進めようとしている。この取り組みの中心となるのは「オープンファーム」である。

オープンファームとは、有機栽培をしている農家の畑を開放し、村内の散策途中に畑から直に有機野菜を購入出来るというシステムである。田舎の風景の中をウォーキングし、健康的な野菜を購入するという「健康」にこだわったシステムとなっている。

また、このオープンファームと有機野菜の栽培を柱として、図-1に示すようなまちづくりの構想を考えている。

まず、オープンファームを実施することにより、直接的な効果として観光客の増加が見込まれる。また、それに伴う「健康」という村のイメージ向上にもなる。続いて、副次的効果として、休耕地の減少が考えられる。高齢者の家庭では、自分たちの食べる分と少しの収入になるだけの耕作をしていることが多く、地主が集落内にも関わらず耕作放棄されている農地も多い。佐那河内では「継続的にオープンファームをやるなら今使って

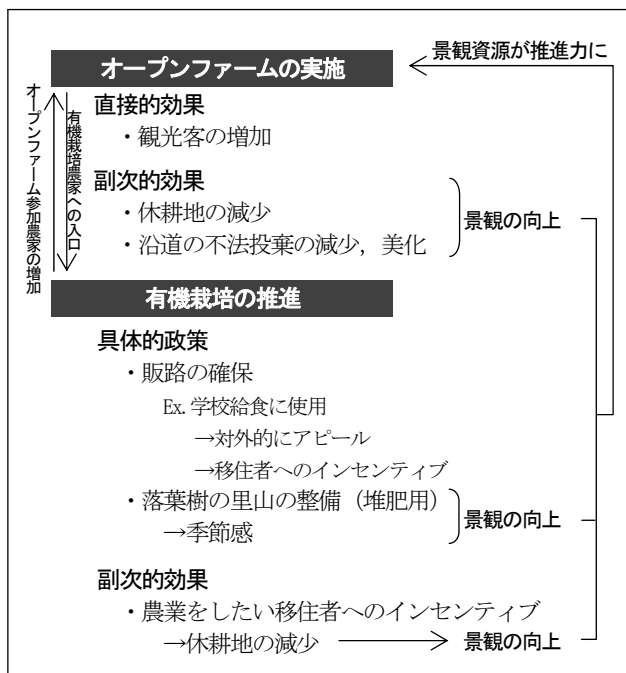


図-1 「健康を核にしたまちづくり」のビジョン

いない畑も使う」と言う農家の方がおり、オープンファームの実施によって現実的に休耕地が減少する可能性がある。また、集落内を地域外の人が歩くことによって沿道に放置された農具等の減少、花を植えるなどの美化が期待できる。

オープンファームでは、基本的に収入を目的とはせず、来訪者との交流が目的となるため、気軽な気持ちで有機栽培を始める人の増加も期待できる。

一方で、中山間地の一次産業を活性化させるため、付加価値の高い農業として有機栽培の推進を政策として行うことも構想の一つである。推進策の具体的方策のひとつは、行政ができる販路の確保として村内の学校給食に使用することである。またこれを対外的にアピールすることによって、健康志向の強い移住者へのインセンティブにもなると考えられる。

他には、村内の耕作地周辺の里山、およびすでに耕作放棄され杉林等になっている場所を落葉樹の里山に再整備し、堆肥の生産に充てることも考えている。これにより、紅葉や新緑など季節感が増し、村の景観向上が期待できる。

有機栽培の推進による副次的効果としては、村をあげて有機栽培をしていることにより、農業をしたい移住者へのインセンティブになることが考えられる。これにより一次産業の次世代への継承が行われ、同時に農村風景の維持にも繋がるといえる。

以上が「健康を核としたまちづくり」の概要であるが、これらは先に述べた1)～3)の論点にかなう総合的なまちづくりのビジョンであると言える。

3. ビジョン作成の経緯

(1) ビジョン考案の発端

本章では、先述したビジョンがどのように出来たかについて説明を行う。

発案の発端は佐那河内がもともとジョギングやサイクリング、ウォーキングなどによく活用されている場所であるということであった。健康志向の強い村外の人たちが、運動をするために来訪する場所である。

しかしながら現状では村内を貫く国道438号を通るのみで、村内に立ち寄ることもなかった。しかしながら佐那河内は県内の他の中山間地とは異なり比較的ゆるやかな丘陵地が多く網の目状に道路が走っているため、回遊性があるという特徴を有している。また、筆者の先行研究¹⁾により、継続的に運動を行う際には農作物の生長等の「変化する風景」が好まれることが明らかとなった。

そのため、単に国道沿いを通るのみならず、イギリスのフットパスのように農地の間を抜けるコースを設定できるとより風景を楽しみながら飽きずに運動が出来るのではないかと筆者は考えた。つまり「運動をしにくる場」として、来訪者の目線で考案したといえる。しかしながらそれは、村にとっては「イメージ向上」以外の効果を持つものでは無かった。

(2) ビジョンの修正

ウォーキング、ジョギングコースの整備を目的として、佐那河内の住民とワークショップを開催した。そこで出された主な意見は、以下の通りであった。

- ・ジョギングやウォーキングに来るのは良いが、現在では立ち寄ってもらうこともなく、交通の妨げになっているだけである。
- ・どうせ来るならどこかに立ち寄って貰って貰わないと、村民にとっては良いことはない。
- ・国道からでは分からない良いところたくさんあるので、佐那河内の良いところをもっと見て貰うのは歓迎。住民からは「住民の利益」という観点から意見が出されたといえる。

これに加え、農作物の生長を「見る」という楽しみで考えていた農地の間を抜けるコースに対し、役場職員(職員A氏とする)から「畑で野菜を購入するのはどうか」という案が出された。職員A氏は、住民として地域を活性化させるNPO活動も行っており、有機栽培をしている農家を知っていたこと、地元の農家と来訪者を結びつける仕組みを考えたいと思っていたことが、この発言の背景にあったようだ。

これを筆者が「オープンファーム」と名付けたことにより、一つのシステムとして認識されることとなった。

4. ビジョンの実践と課題

(1) オープンファーム

a) 実践

当初は、現在ウォーキングやジョギングに来る人たちが自由に来ているように、村内の農地を自由に散策できるシステムとして考えていた。しかし畑で野菜を買える「オープンファーム」になったことで、それを実践するには、畑に人が待機している必要が出てきた。そこで、イベントとして開催するのがふさわしいものとなった。

1回目のイベントは「村づくり住民会議」の手によって行われた。佐那河内村では5つの部会からなる「村づくり住民会議」を立ち上げている。これは、住民が行政と共に村づくりに関わるため、役場が立ち上げた組織で、まちづくりに関心のある住民がボランティアで参加するものである。このうち「環境にやさしい村づくり部会」に、有機栽培をしている方がいらっしやったこともあり、この部会で「オープンファーム」の実施が企画され、2011年12月に開催した。

運営に関わった住民は、自分が作った野菜を来訪者が目の前で喜んでくれるという点で、非常に満足度が高かったようである。また、来訪者からの評判も良かったようで、新聞に良かったという感想が投稿されたりもした。そうしたこともあり、担当職員、住民会議の住民、筆者のみならず、村長も含めた関係者の間で、佐那河内独自の取り組みとして「オープンファーム」を育てていくことが共通認識となった。

その後のオープンファームは雨で中止されるなど、初回と同じ形では実践できていないが、若手の役場職員でつくる、来訪者を増やすことを目的とした団体「ごうちる」において「オープンファーム」を取り入れた企画を実施したりしている。これは、村内を散策して畑で野菜を収穫、その後、村内の野菜を使って料理をつくって食べるというイベントである。畑で収穫した野菜はお土産として持って帰ることが出来る。野菜の代金は参加費に含まれており、農家に還元される仕組みになっている。

このように、少しずつではあるが実践を積み重ねているため、有機栽培をする農家の方が自主的に「オープンファームクラブさいさい」を結成するなど、受け入れ組織も整いつつある。

b) 課題

オープンファームを「1) 風景を生み出す一次産業を成り立たせること」、「2) 風景を活用し、地域に活力を潤いをもたらすこと」、「3) 風景を維持する次世代を取り込むこと」の3つの論点から考察する。

まず最初に、オープンファームの本来の目的である「風景を活用し、地域に活力を潤いをもたらすこと」については、来訪者を呼び込むという点では、実施によっ

て概ね達成されつつあるが、農家の方を含め実施している関係者間で「風景を活用している」という認識が共有されていない。そのため、有機栽培を里山の保全と結びつけると言った他の活動と関連させる動きが出てきていない。

続いて「風景を生み出す一次産業を成り立たせること」については、オープンファームは生活の柱となるような収益を期待しているものではないため、直接的にはこれに対する効果は薄い。しかしながら現状では有機栽培そのものがうまく行っていない面もあり、有機栽培を産業として成り立たせるためのフラッグシップにも、なり得ていない。そのためオープンファームを入口とした「有機栽培農家の増加」にも結びついておらず、次世代の継承という効果もまだ得られていない。

(2) その他のビジョンの実践と課題

その他、「健康を核にしたまちづくり」のもう一つの柱である「有機栽培の推進」については、現状ではあまり進んでいないのが実情である。1)の論点に示すように、一次産業の成立は、経済の話でもあり、同時に風景資源の維持という効果も持つが、住民および行政内でこうした経済と風景の話を総合的に話し合える場を設定できていないのが要因であると考えられる。

有機野菜の販路のひとつとして学校給食用に村が購入しているが、この実績を対外的に公表することは行われておらず、また地元の有機野菜率の向上等の目標も掲げていない。これも上記の要因と同様、教育と移住政策の話を同時にする場を持ってないためであると思われる。

里山の整備については、有機栽培があまり進んでいないため、堆肥用の落ち葉の需要自体が少ないことから、実施できていない。しかしながら来訪者が村内を歩くオープンファームは実践できているので、季節感を演出するという目的から里山の整備を実施することは可能であると考えられる。

5. まとめ

本稿では、佐那河内における「健康を核としたまちづくり」の概要と現状および課題について考察した。景観という目に見えるものをよりどころに暮らしや次世代への継承を総合的に含んだビジョンとなっているが、その総合性を住民や行政で共有する場が持ちにくいことが、推進にあたっての課題であると言える。

参考文献

- 1) 西部絵理, 真田純子: ウォーキングにおいて重要視される風景とその役割に関する研究: 徳島県吉野川市を対象として, 都市計画論文集, vol. 44, No. 3, 2009